国際政治経済論演習　卒業論文

紅茶と意識化　～インド紅茶の考察～

外国語学部英語学科４年　鈴木沙波

要旨

「どうして日本人は貧困問題に疎いのか？」これは著者が兼ねてから抱いている疑問である。この素朴な疑問に対し「貧困問題への関心・認識が薄い」日本人にとって、自分と貧困問題を関連付けるきっかけがほとんど存在しないところにその一因があるのだと考える。

モノが溢れる日本の社会で生活をしていると、貧困などはまるでないのかのような錯覚に陥りやすい。現実、消費者である私達は消費をしている一方で生産者は懸命に生産している。この顕著な例は先進国の私達消費者と発展途上国の生産者の場合である。このありありは、自分達があたかも二分された世界で生きているような感覚を抱かせる。現在、多くのモノが私たちの目の届きにくい発展途上国で生産されている。それを先進国で暮らしている私達が消費をしている現状があることから、自分達は発展途上国の生産者が抱える問題などとは関係がないと思うことはある意味自然な流れとして、捉える事ができるのかも知れない。しかし、本当に消費者は生産者と切り離された世界で暮らしているのだろうか。例えば生産者が直面している貧困問題はどうであろうか。私たちは貧困と無関係に存在しているのだろうか。ここで、発展途上国で生産してる何らかのモノに焦点を当てたら何かが見えてくるのかもしれないと感じた。

私は夏休みに大学のサークルの一環としてインドの紅茶農園、ダージリン地方でダージリンティを生産しているナムリン紅茶農園を訪れた。短期間ではあったが茶農園に滞在する事によって、今までは紅茶を消費する側にいた私にとって生産者を知る貴重な体験となった。

この機会を利用し、論文の中で発展途上国で作られているモノとして、インドの紅茶を取り上げたいと思う。それには、私自身がモノである紅茶と自分を関連付けることで、貧困問題を改めて考えるきっかけになったという背景がある。現在多くの労働者が紅茶産業に従事し、私達が気軽に消費する紅茶を生産し続けている。その一杯のインドの紅茶に焦点を当て、紅茶産業の歴史・現状・問題点を指摘したい。

現在、インドには大別して二種類の紅茶農園が存在する。一つは企業所有の農園で、もう一つは小規模農園である。企業所有の農園は広大で、ユニリーバ社が所有する日本で主流のリプトンイエローラベルの商標は企業所有の農園の代名詞的な存在であり、これらの茶農園は紅茶の生産の９６％を占めている。それと対照的に小規模農園はわずか４％の紅茶の生産しかしていない。紅茶は国際商品のため、国際市場価格の変動に敏感な小規模農園の労働者の生活は成り立ちにくく経済的貧困に陥り易い。現在、紅茶のモノカルチュア

で生計を立てているこの小規模農園の現状改善のために必要と思われる自給自足、小規模農園者によるネットワークについて論じたいと思う。これを可能にする一つの形として協同組合紅茶農園を取り上げる。そして実際にインドで機能している協同組合を考察し、その役割を示し可能性を考察する。最後に結論としては、私たち消費者はインドの紅茶生産者と身近な存在となりうることを論じる。貧困問題は海を隔てた「遠くの国々」で起こっている問題でなく、私たちの生活に密接に関係しているということを示そうと試みる。

主要参考文献

Department Related-Parliamentary Standing Committee on Commerce 編、
Parliament of India-sixty fourth Report of export of TEA 19th of August, 2003,
http://rajyasabha.nic.in/book2/reports/commerce/64threport.htm
Make Trade Fair OXFAM 編、 The Tea Market –a background study, ,
http://www.maketradefair.com/assets/english/TeaMarket.pdf
Sharit Bhowmik,1988, Producers' Co-operatives in the Indian Tea Industry,